

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 前島 訓子

論 文 題 目 遺跡から「聖地」へ

ーインド・ブッダガヤにおける「聖地」再建のダイナミクスー

論文審査担当者

主 査 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 田中 重好

委 員 名古屋大学大学院環境学研究科 教 授 丹邊 宣彦

委 員 名古屋大学大学院環境学研究科 准教授 河村 則行

委 員 中部大学国際関係学部 教 授 和崎 春日

論文審査の結果の要旨

別紙 1 - 2

論文審査結果の要旨

本論文の目的は、ブッダの悟り地・仏教最大の聖地、インド・ビハール州ガヤー県のブッダガヤを事例に、「場所」（空間への意味づけの対象）概念を手がかりにしながら、聖地化のプロセスを社会的諸主体の場所への関わり方のダイナミックスのなかで捉えることにある。

第1章では、聖地や巡礼をめぐる先行研究と場所論をレビューした上で、聖地を研究する視点を提示した。第2章では、仏教の歴史を振り返り、本研究の課題を整理した。仏教は13世紀頃にはインドにおいて姿を消し、ブッダガヤも長らく忘れられていた。英領植民地期に考古学的調査・発掘が進み、ブッダガヤがブッダ悟りの地として同定され、仏教遺跡としての意味を取り戻した。次いで、西欧での仏教的関心が仏教復興運動や大塔返還運動の引き金となり、その運動によって歴史的遺跡が宗教的な意味を帯び始めた。こうした歴史的な経緯を確認した上で、独自の現地調査を進めた。

第3章では、考古学的発見以降、ブッダガヤが仏教の聖地に築き上げられていくプロセスを明らかにした。仏教儀礼の歴史的展開、国外の仏教寺院建設の増加と空間の変容、巡礼者や観光客の増加の過程を描くことで、ブッダガヤが仏教聖地としての意味を形成してきたことを明らかにした。

第4章では、この仏教化の過程を地域社会の側から研究している。それ以前のブッダガヤはMahant（ヒンドゥー教のシヴァ派の僧院（Math）院長でかつ大地主）を中心とする社会を形成していた。ブッダガヤの仏教聖地化は、こうした伝統的な地域社会構造の変容をもたらした。ブッダガヤ地域の住民の仏教改宗の動きや観光化、ヒンドゥー教、イスラム教の寺院の再建の動きをカースト集団と関連させながら分析することで、聖地化と地域社会との相互関係を明らかにした。第5章では、インド独立以降、大塔の管理を担う寺院管理組織の特徴とその活動内容、新仏教徒による大塔返還運動、さらに遺跡の世界遺産登録（2002年）にともなう大塔周囲の開発計画とそれへの反対運動を検討し、グローバルレベルから地域レベルの社会的諸主体が複雑に絡まりあいながら聖地化が進められたことを明らかにした。

以上の検討を踏まえ、(1)ブッダガヤの仏教の聖地化という過程は、単純な仏教の聖地化ではなく、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が生活する空間のなかで多様な聖地像が共存するものであったこと、(2)そのことがブッダガヤに固有な聖地像を付与していること、(3)「忘れられた聖地」から考古学的発見、宗教的な意味の付与、さらに、仏教聖地化というプロセスは、グローバルな仏教への関心と信仰、インド政府の「多様性のなかの統一」政策、世界遺産登録、伝統的なヒンドゥー教中心の社会構造の近代化にともなう変容のなかで、様々な社会的諸主体がぶつかり合うダイナミックな磁場において進められてきたと結論した。

本論文は、これまでのブッダガヤ研究とは異なる独自の社会学的な視点（宗教的な観点を含み込む社会的な視点、地元地域社会からの視点）から、ブッダガヤの聖地化のプロセスと現状を明らかにした論文で、これまでの聖地研究に新しい知見を与えている。よって、本論文は博士（社会学）を授与される資格があるものと判定した。